

《修士論文要旨》

河村岷雪と葛飾北斎の「富嶽図」

* 森 崇 弘

葛飾北斎は江戸中期の宝暦十年（一七六〇）に江戸で生まれ、二〇一〇年に生誕二五〇年を迎え、日本各地で多くの展覧会が開催された。北斎は浮世絵に「風景画」という新たな要素を加えた人物であり、『富嶽三十六景』（以下三十六景）はあまりにも有名である。しかし、三十六景を描くにあたって、北斎が影響を受けたと言っても過言ではない作品が存在することを知る人は少ない。それは、河村岷雪という人物が描いた『百富士』（以下百富士）という作品である。私は、北斎の研究を進める内に、岷雪の百富士を知り、三十六景と類似する作品がある事を知った。百富士と三十六景、また、北斎が三十六景を描いた後に描いた『富嶽百景』（以下百景）との関係を扱った論文はあるが四半世紀も前の物であり、多くの例を挙げ対比するものはない。この論文では、北斎が岷雪の百富士から得た物をいかに三十六景、また百景へと取り入れ、自分なりの表現に変化させて作品を描いたかを、各三作品を対比することによって読み解きたいと思う。

北斎は様々な場所から見た富士の姿を描いた風景画であった『百富

士』を単なる風景画ではなく、富士と人々の姿や生活風景を加えることで『富嶽三十六景』として描き、さらに、より人々の生活に密着して、日常の一コマをそのまま図にした『富嶽百景』を描いた。北斎が『百富士』に影響を受けたことは各図の対比から明らかであるが、岷雪の構図を自分のそのまま作品に取り込むのではなく、取り込み、咀嚼し、自分の表現として二作品にそれぞれの持ち味を持たせたことは、幼いころから絵をかいていた北斎だからこそできたのではないだろうか。